

陳後主の文学に対する評価

一 唐・朱敬則「陳後主論」、呂温「人文化成論」から

『漢魏六朝一百三家集』、『采菽堂古詩選』まで一

久保卓哉

陳後主は、唐朝にいたる歴代天子の中でも三番目に多い巻数の文集を残し、その生涯を通して六朝の栄華と退廃をつぶさに見た天子である。陳後主の文学はいかなるものであったのか。その全容を明らかにすることは、五十巻に及ぶ文集の全てが残存するわけではないために困難を伴うが、本論文において、後世の諸論に見える陳後主文学の評価を、唐代の文章と明清に編修された陳後主文集とをもとにして明らかにした。

「キーワード：朱敬則 陳後主論 呂温 人文化成論 張溥 漢魏六朝百三家集 陳祚明 采菽堂古詩選」

一 はじめに

陳後主叔室に対する評価は様々に分かれる。宴遊酒色の果てに亡国に至らしめたという評価と、先人の業績を継承し、六芸文学を修めて天人の望みに^{かな}ふったという良い評価である⁽¹⁾。だが、待つてほしい。そのような良い評価は聞いたことがない、と手が挙がるほど、陳後主は亡国の天子として私たちの記憶にある。だが、陳後主は文学的な評価が高いことも記憶しておかなければな

らない。

二 唐代小説と唐詩

隋の文帝楊堅とその子晋王楊広(後の煬帝)によって滅ぼされた陳後主は、幸いにも隋の厚遇を受けて五十二歳の天寿を全うし、洛陽の芒山に手篤く葬られた。その生涯は人の関心の的であったのだから、早くも唐の伝奇小説『大業拾遺記』に愛妃張麗華と

もに登場し、煬帝の宮中秘事を描く物語に華を添えている。初唐の顔師古撰と銘打つこの小説は又の名を『隋遺録』とも『南部烟花録』『南部烟花記』『大業拾遺』『大業拾遺録』とも伝わり、かなり広く世に通行していた⁽²⁾。これに加うるに詩においても、李白の「金陵歌送別范宣」や劉禹錫「金陵懷古」杜牧「泊秦淮」許渾「金陵懷古」などがあり、陳後主は多くの詩人によって歌われていた⁽³⁾。陳後主は人々の記憶から消え去るところか、間断なく脳裏に去来し続けてきたのである。

三 唐代の文論——朱敬則の「陳後主論」

文においては、初唐の人朱敬則(六三五一七〇九年)に「陳後主論」があり、その亡国に至る内的要因と、隋による外的要因の分析が駢体の美文で著されている。正諫大夫でもあった朱敬則は「魏武帝論」「宋武帝論」「北齊高祖論」「梁武帝論」等を著してその興亡を論じているが、この「陳後主論」の中で、亡国の原因を次のように指摘している。

礼儀を挙げず、苛刻は日に滋し。隣好に敦からず、驕傲を是れ務めとす。嬖妾五十、尽く珥貂の容有り。麗服一千、咸夭桃の色を取る。加うるに貴妃夾坐し、狎客承筵するを以てす。玉貌絳脣、宮徵を咀嚼し、花綫綵筆、烟霞を吟詠す。長夜も疲まず、略醒むる日無し。(『文苑英華』卷七百五十三興亡下)

この論で面白いのは後半部を「或」と「客」の間答形式にして進め、最後に「客曰、入井下策也」⁽⁴⁾井戸に逃げ込むのは下策だと客に言わしめてこの論を結んでいることだ。陳後主が張貴妃、孔貴人とともに井戸に逃げ込んだことを「下策」と決めつける朱敬則は、それを自分ではなくて客に語らせることによって、より一層陳後主の哀れさを私たちに伝える。

かように朱敬則は陳後主を否定的に捉えるが、しかし負の評価ばかりではない。陳後主の正の部分の部分を次のようにいう。

長城公は、器識古人のごとく、平を承けて主を嗣ぐ。其の忠讜の士を求め、左道の人、淫祀妖書、鏤薄佞物を禁ぜしを觀れば、即ち古の明哲なり。何を以て加えんや。

太平に帝位を継承した長城公(陳後主)は、器度見識に古人の風があり、彼が、忠誠正直の人士を求め、邪道の人や邪淫な祭祀を禁じ、邪説の書や金銀の裝飾などを禁じたのを見れば、彼は古の明哲であることが分かり、これを越えるものはない、という。⁽⁵⁾

この朱敬則の陳後主に対する「古明哲」なりという正の評価は、彼が著した「魏武帝論」「宋武帝論」「梁武帝論」にも見出せない評価である。この評価の根拠は陳後主が即位した後の太建十四年三月と四月庚子に発した詔にある。

内外の卿士、文武の衆司よ、若し智、政術に周く、心、治体に練れ、民俗の疾苦を救い、禁網の疎密を弁ずる者有らば、

各忠讜を進め、隱諱する所無からしめよ。朕は將に己を虚しくして聴受し、善を扨んで行わんとす。庶わくは物情を深鑑し、我が王度を匡さんことを。

〔陳書〕卷六後主本紀

応に鑲金銀薄、及び庶物化生、土木人綵花の属、及び布帛幅尺、短狭輕疎は、並びに財を傷い業を廢するものにして、尤も蠹患を成すべきものなり。又僧尼道士、挾邪左道の、経律に依らざるもの、民間の淫祀祓書、諸珍怪事は、詳しく條制を為りて、並びに皆禁絶す。

〔陳書〕卷六後主本紀

時に三十歳であつた陳叔宝の、天下を治めんとする氣概に満ちた、まことに熱き宣言である。これらの「民を救」うに「己れを虚」しくし、「物情」に通じて「我が王度」を正すこと、及び奢修淫祭を「禁絶」するという熱き宣言は、古来の為政諸王が心がけてきたものであつた。例えば、

我が王度を思い、式うこと玉の如く、式うこと金の如し。

〔春秋左氏伝〕昭公十二年

頃公は苑囿を弛め、賦斂を薄くし、孤を振い疾を問ひ、積聚を虚しくして以て民を救う。

〔史記〕卷三十二齊太公世家

元帝初めて即位し、(頁)禹を徵して諫大夫と為し、数己れを虚しくして以て政事を問う。

〔漢書〕卷七十二貢禹伝

明君は四海を御すに、聴鑑して物情を尽くす。

〔晋書〕卷二十三樂志下

崩に臨みて又詔す。「……金粟繪紕、民を弊すること已に多く、珠玉の玩好は、工を傷ましむること尤も重く、嚴しく禁絶を加う。」

〔南齊書〕卷三武帝紀

等がある。こうした治世の本則を履行しようとした陳後主を朱敬則は「古明哲」と評価したのであろう。

後主を評価する論評はこれ以外にもある。唐、貞觀二十一年(六四七年)に八十八歳で卒した褚亮を顕彰した碑文「散騎常侍贈太常卿陽翟侯褚公碑」(闕名撰)に、

陳後主は栖神雅什、纂歷して鴻図す。

〔全唐文〕卷九百九十一闕名三二

陳後主はもともと高雅な精神を持ち、即位して宏遠な帝業を企図した、とあるのがそれだ。この碑で顕彰された褚亮は、十八歳で徐陵と文章を論じて頭角を現し、それを聞いた陳後主(東宮期)に招かれて詩を賦し、満座の推奨を得たことで知られ、書家褚遂良の父にあたる(旧唐書)卷七十二褚亮伝)。この碑文の作者は不明だが、先の朱敬則と同じく初唐の人によつて著されたものである。陳後主への正の評価は朱敬則の論と同じである。

四 唐代の文論——呂温の「人文化成論」

これらは後主の治世への評価だが、後主への評価の濃さは治世よりも文学にある。

中唐の論客呂温（七七二—八一二）は、柳宗元によって「天の英を窮め、古の識を貫く」（柳宗元「祭呂衡州温文」）増広註釈音辯唐柳先生集「卷第四十」と称えられた政治家であり文学者だが、その呂温に、自らがしばしば唱える「人文化成」の主張を集大成した「人文化成論」がある。この論の中で呂温は、『周易』賁卦彖伝に見える「人文を觀て、以て天下を化成す」を冒頭に引いて論の柱とし、その「人文」には、父は慈愛で子に教え、子は孝養で父に尽くし、夫は剛毅、妻は柔和であるべきという「室家の文」があり、君主は仁愛で臣下を使い、臣下は忠義で君に仕え、私が誤つたらあなたが補佐し、善いことは進言し悪いことは諫言するという「朝廷の文」があり、また「官司の文」「刑政の文」「教化の文」があると分析する。つまり「文」とは、「庶績を錯綜し、人情を藻繪すること、文を成すが如くにして、以て其の理を致す」ことで、それが則ち「人文化成」の義であると理想を説く。だがしかし近代の諂諛の臣は、と続けて、呂温は現実を目を向け、理想とはほど遠い現状を痛烈に批判する。今や時君の不能をよいことに、表面上は堯舜を祖述して「天下を化成す」という文を作りながら、実際には「旃裳冕服」（旃章と礼服）と「章句翰墨」を人文としている。これは何と痛ましい限りではないか。しかしながら、この論の後に呂温は陳後主と隋煬帝に言及して次のようにいう。

必ず章句翰墨を以て人文と為すは、則ち陳後主、隋煬帝なり。雍容綺靡にして、洋溢たる編簡あり。文思安安と曰ふべし。何ぞ滅亡することの速やかなるや。

（『唐呂和叔文集』卷第十「人文化成論」）^⑥

陳後主と隋煬帝は多くの文集を残し、章句翰墨（章句学と文学）において人文に際立った天子で、その才知道徳はまことに称頌される、という。「文思安安と曰ふべし」とは、帝堯の徳の高さを称揚することを意味する「放勳欽明、文思安安」（『尚書』堯典）を典故にもつ言葉で、陳後主、隋煬帝二帝の帝徳はかくも高いと称揚する。そしてその理由として「章句翰墨」と「洋溢編簡」（文集）を挙げていることが注目される。

後主は文集が「洋溢」であると評価が定まっていたことは、次の唐太宗の言葉が傍証となる。それは『貞観政要』に記されている。貞観十一年、著作佐郎鄧世隆が、「太宗の文章を編次して集と為さんと表請」したことに對する太宗の言葉である。

朕若し事を制し令を出して、人に益する者有らば、史は則ちこれを書して、不朽と為るに足る。若し事古に師はず、政を亂し物を害せば、詞藻有りとも雖も、終に後代に笑いを貽す。須む所に非ざるなり。祇だ梁武帝父子及び陳後主、隋煬帝の如きは、亦た大いに文集有るも、為す所は多く不法にして、宗社皆須臾に傾覆せり。凡そ人主は惟だ徳行に在るのみ。何ぞ必ず文章を事とする要あらんや。

〔貞観政要〕 卷七文史第二十八

結局この時太宗は文章よりも徳行が大事だといって文集を編むことを許可しなかったのだが、その理由に、梁武帝、昭明太子とともに「大有文集」の人主として陳後主と隋煬帝を挙げているのがそれである。

このような評価が定着していたことは、また、晩唐の弘文館大學士鄭覃ていたんの言葉によっても伺い知ることができよう。文宗が延英殿で古今の詩句の工拙を論じた時、鄭覃は自説を奏聞している。

近き代の陳後主、隋煬帝は、皆章句を能くするも、王者の一端を知らずして、終に季年の失有り。章句は小道なり。願はくは陛下取らざらんことを。〔旧唐書〕 卷一百七十三鄭覃伝

先の太宗の言葉もこの鄭覃の言葉も、天子にとって大事なのは政治経学であって、文集、章句ではないことをいうために引き合いに出されたものだが、鄭覃が「章句を能くす」と表現するように、後主の場合は亡国に直結するだけに、とりわけその文学が色濃く認識されていたわけである。

そもそも帝王と文との関係は、堯舜に始まる。帝堯を賛頌した言葉に「文思安安」があり、帝舜を賛頌した言葉に「濬哲文明」〔尚書〕舜典〕がある。そして孔子が「煥として其れ文章有り」〔論語〕泰伯〕と堯の偉大さを頌えて以来、後世の帝王は文集をものにするることによって有徳の証しとしてきた。従って『隋書』経籍志に

見えるように、

- 漢武帝集 一卷（梁二卷）
- 魏武帝集 二十六卷（梁三十卷）
- 魏文帝集 十卷（梁二十三卷）
- 魏明帝集 七卷
- 陳思王曹植集 三十卷
- 晉宣帝集 五卷
- 晉文帝集 三卷
- 宋武帝集 十二卷
- 宋文帝集 七卷

等、帝王に多くの文集があるのはそういう理由による。

唐太宗が「大有文集」の帝王として挙げた梁武父子と陳後主、隋煬帝の文集の巻数は、『旧唐書』経籍志によると、

- 梁武帝集 十卷
- 梁昭明太子集 二十卷
- 陳後主集 五十卷
- 隋煬帝集 三十卷

とあり、陳後主集五十巻の巻数の多さが際立つ。これは

〔唐〕高宗大帝集 八十六巻

梁簡文帝集 八十卷

梁元帝集 五十卷

に次ぐ巻数で、単純な比較は危うさを伴うが、呂温、太宗、鄭覃が評価した後主の文学色の濃さを示す傍証となろう。

五 明の編修文集——張溥「陳後主集題詞」

次いで目を明代に移すと、陳後主の賦、詔、勅、書等二十八篇、樂府六十八首、詩二十九首を収めて『漢魏六朝一百三名家集』を編んだ明・張溥の「陳後主集題詞」がある。この題詞で陳後主の文学を論じた内容は傾聴にあたいする。張溥は後主の東宮時代を評価して、

史に称す、後主は徳を儲宮に標して、允望を継業し、故典に
遵い、六芸を弘め、金馬、石渠に、稽古のひと雲のごとく集
まり、梯山航海して、朝貢は歳ごとに至ると。辞は誇説と雖
も、其の平日を審かにせば、固より鬱林東昏とは殊趨せり。

〔陳後主集題詞〕

と南斉の鬱林王、東昏侯とは違った文武経世の徳を持っていたことをいう。

ここで張溥が比較の対象としてあげる鬱林王、東昏侯について述べておこう。

鬱林王蕭昭業は祖父である第二代皇帝齊武帝の後を継いで二十歳で帝位につく。本来は父の文惠太子が帝位につくはずであったが、父が病死したためにその長子の鬱林王が即位したという経緯をもつ。鬱林王は父の病氣とその死に際しては献身的に付き添い人びとの涙を誘ったが、一旦私室にもどると陽気に歡笑酣飲してご馳走を頼張るといふ人物であった。即位後一年も経たないうちに、祖父武帝が蓄えた数億万の金銀財宝の大半を使い果たし、宝器を持ち出しては宝器と宝器をぶつけて壊して遊ぶといふ有り様。宮内ではいつも裸体で過し、身につけるものといえば紅紫色の新奇な上衣と紅色の奇抜な下衣で、父の愛姫であった女性と淫通していた〔南史〕卷五齊本紀下廢帝鬱林王。

廢帝東昏侯蕭宝卷は齊明帝の第二子で、奢侈と冷酷非道で知られる。その行状をいくつかあげれば、東宮時代には書学を喜ばず、明け方まで鼠をおいかけて遊び、五更（午前四時）に就寝して夕刻に起床する有り様。そのために臣下は夕刻に拜謁して夕闇の中退出した。即位後には、危篤の病人はすべて担いで城外に移させ、担ぐ者がいない病人は道路の端を匍匐して行かせ、それを役人が鞭打つたために道端で絶命する者が累々と横たわっていた。沈公城の家を訪ねて婦人が出てこなかった時は、帝自ら家に入って婦人が出産間際だと知るや、腹を割いて胎児の男女を見分ける始末。芳楽園は奇を窮め麗を極めた造営で、すべての石に彩色を施し、池水を跨いで紫閣諸楼を建て、壁には男女歡樂の図を描き、父明帝が集めた黄金を利用して金で泥を練り、足らなければ富豪に黄金を出させたといふ〔南史〕卷五齊本紀下廢帝東昏侯。

張溥は、陳後主はこれら二帝と大同小異だと考えられがちだが、その「故典に遵い、六芸を弘め、金馬・石渠（蔵書官署）に、稽古のひと雲のごとく集」った陳後主を同列に扱ってはならないというのである。

だからもしも陳後主が、

後主をして当に太平に生きしむれば、次いで諸王に^{まじ}り、竟陵の文藻を歩み、臨川の黷^{せう}貨を賤しみ、開館読書して、令譽を失はず。

太平の世に生まれていれば、南斉、竟陵王子良のように文学の華を咲かせ、梁の臨川王の如き愛錢を卑しみ、大いに開館読書してその令譽を失うことはなかったという。

南斉の竟陵王蕭子良は齊武帝の第二子で、上述の鬱林王の叔父にあたる。義に敦く古を愛し、清尚といわれた蕭子良の永明年間の文学活動は有名で、その西邸を開いて文学の士を招きそこには沈約、謝朓、王融、任昉、范雲等の天下の才学が集まり、多くの文章辞翰が撰録された。その活動の一端は「学士を集めて五経百家を抄し、皇覽の例に依りて四部要略千巻を為る。名僧を招致して仏法を講語し、経を造りて新声を唄い、道俗の盛んなること、江左に未だ有らず」（『南齊書』卷四十竟陵文宣王子良伝）と伝わる。

また「臨川の黷^{せう}貨」と引例する梁の臨川王蕭宏は、奢侈で錢を愛し、酒色を好んだことで知られる。好物の鱸魚（ふな）の頭は毎日三百を用意させ、食卓には珍膳があふれて食べきれないもの

は道路に捨てさせ、愛した錢は、百万、千万を集めるたびに黄や紫の色標を立てさせ、その標識は三十間の長さに及んだという（『南史』卷五十一梁宗室上臨川靖惠王宏伝）。

張溥は、もしも陳後主が六朝末の混乱期ではなく太平の世に生まれていれば、竟陵王子良のように文藻の華を咲かせ、臨川王の行状を卑しみ、その令譽は失われることはなかったというのである。

そして、漢武帝と陳後主の詩歌を比較して、

漢武の李夫人歌と落葉哀蟬曲とは、憂傷後代に過ぎて、しかも四夷は威に服す。後主の詞は絶淫にあらず、亡ぶこと且く忽たるのみ。哀にして起こさざるは、声音の間に在りて、独り篇章のみにあらざるなり。

漢武帝の「李夫人歌」と「落葉哀蟬曲」は愛姫李夫人を歌った艶歌だが、天子が女性の美と夫人への愛慕を歌ったからといって亡国に至ったわけではなく、四夷は武帝の威に服した。それに対して陳後主の場合は四夷が威に服さず亡国に至ったのだが、その詩歌は決して絶淫ではない。亡国に至る原因は単に文学のせいだけではないと張溥はいうのである。

六 清の編修文集——陳祚明『采菽堂古詩選』

清では陳祚明の『采菽堂古詩選』がある。陳祚明は陳後主の詩

二十一題三十一首を採録し、その冒頭で陳後主の詩を論じて次のようにいう。(7)

後主の詩は、才情飄逸にして、態度は便ち妍うるわし。固よりは是れ一時の雋なり。

後主詩、才情飄逸、態度便妍。固是一時之雋。

人の才思は、各おの寄る所有り。其の一時の体に就きて、極を充たし量を分かつも、亦た一長に擅すくれたるなり。況や清と麗は六朝に如く者あらんや。六朝の体は清と麗と兼ね擅すくれたる故に佳し。麗にして清ならざるは則ち板、清にして麗ならざるは則ち俚。人は六朝を以て麗と為し、吾は尤も其の清を賞するなり。

人才思各有所寄、就其一時之体、充極分量、亦擅一長、況清麗如六朝者乎。六朝体以清麗兼擅故佳。麗而不清則板、清而不麗則俚。人以六朝為麗、吾尤賞其清也。

謝茂秦詩を作るを論じて、先ず警句を得んと欲すべしと。此れ古人の意章を作る法を知らざる故なり。今を以てこれを觀れば、唯だ後主の詩のみ誠に然り。

謝茂秦論作詩、欲先得警句。此不知古人作意章法之故、以今觀之、唯後主詩誠然。

陳後主の詩は、春花始めて開きて色鮮やかなるが如し。故に縦ほしまままに採まげて片萼を取るを貴ぶも、亦た自ら淹蔚たり。

陳後主詩、如春花始開色鮮、故貴縦採取片萼、亦自淹蔚。

陳後主の詩は、徐生の容を為して、顧歩登降するが如し。事に修飾にして、これを望めば嫣然たるも、然れども未だ礼の意に達せず。

陳後主詩、如徐生為容、顧歩登降、事事修飾、望之嫣然、然未達礼意。(『采菽堂古詩選』卷之二十九陳一後主)

『采菽堂古詩選』の陳祚明の詩評は、歴代の詩話に見られない評を施したことで知られ、周勛初(南京大学)や曹道衡(中国社会科学院)の碩学はしばしば論文に引用する。ここで挙げた陳後主評もこれまでの詩話にみることでできないものである。ここに陳祚明の陳後主詩論をまとめておこう。

一 後主の詩は才気情趣に富み、美しい。当時の俊逸の詩である。
二 六朝詩は清と麗の両方において優れている。麗だが清でない詩は板のように味気なく、清だが麗でない詩は優雅さに欠ける。人は六朝詩の特徴は麗にあるというが、私はその清に良さがあると思う。

三 謝茂秦(榛)は『四溟詩話』の中で、詩を作る場合はまず警句を提示して、読み手に興趣を起させ詩全体の柱とすべきだというのが、これは作詩の法をよく分かっている。だがこの点について通覧すれば、陳後主の詩だけがそれにあたる。

(明・謝榛撰『四溟詩話』卷三に「凡そ詩を作るには先ず警句を得て、以て興を發するの端、全章の主と為す」とある)

四 陳後主の詩は、春に花が開き始めて色鮮やかに映え渡っているようなもの。だからついその花びらを摘みたくなる。おのずから蔚然たる美しさがある。

五 陳後主の詩は、漢の儒者徐生が礼の容儀を實踐して、登降歩行の礼を踏み行っているようなもの。つまり、全てにおいて容儀が美しく、見た目は艶やかなのだが、礼の極意にまで達しているというほどではない。

七 おわりに

『全唐文』一千巻を調査した結果、陳後主に言及した文の代表的なもの、ここで取り上げた朱敬則の「陳後主論」と呂温の「人文化成論」だが、これ以外に文武両道の要訣を論じた李竦の「偃武修文論」、文学史論を展開する皮日休の「劉棗強碑」、江南の美しさを描写した王棨の「江南春賦」にも陳後主は登場する。「偃武修文論」では、文武が調和していなかった例として陳後主があり、「劉棗強碑」では、古来の歌詩の風が失われた論説の中で陳後主が引かれ、「江南春賦」では、江南の春の良さに迷ったから亡国に至ったと陳後主が引き合いに出されている。また、唐・李筌撰『神機制敵太伯陰経』では、天の時も地の利も、無道の主と乱亡の国を救うことはできないという論調の中で陳後主が登場している。加うるに崔令欽の「教坊記後序」、杜甫の「朝献太清宮賦」、竇泉の「述書賦」、黄滔の「景陽井賦」、王棨の「闕里諸生望東封賦」、陸龜蒙の「記錦裾」の中でも陳後主はその亡国を、

或いはその詩を想起せしめるものとして登場している。つまり唐の世において、人は、詩歌を論じ、政治を論じ、推移する天地の息吹を感じるたび、陳後主に思いを馳せたのである。

また、歴代の詩話類では、唐・釈皎然の「詩式」を始め、南宋・葛立方の「韻語陽秋」、明・楊慎「升庵詩話」、王世貞「芸苑卮言」、陸時雍「詩鏡総論」、清・賀貽孫の「詩筏」などで陳後主の詩を評しているが、いずれも片言隻語で、ここで取り上げた張溥の「陳後主集題詞」と陳祚明の「采菽堂古詩選」の論評を越えるものではない。とりわけ『采菽堂古詩選』の評辞は前述の総論の他に陳後主の詩三十一首にも及び、その鑑賞眼の独自性が陳後主の詩を生きかえらせている。

注

(1) 陳後主に対する二つの評価は『陳書』にすでに見える。

「後主は深宮の中に生れ、婦人の手で長ず。既に邦国は殄瘁に属くも、稼穡（農業）の艱難を知らず。初めは阨危を懼れて、屢しば哀矜の詔有るも、後稍や安集して、復た淫侈の風を扇る。諸公を賓礼して、唯だ情を文酒に寄せ、羣小を昵近して、皆これに委ねるに衡軸を以てす。謀謨の及ぶ所、遂に骨鯁の臣無く、權要の在る所侵魚の吏に匪ざるは莫し。政刑日に紊れ、尸素朝に盈つ。耽荒して長夜の飲を為し、嬖寵して艶妻の孽を同じくす。危亡にも恤えず、上下は相い蒙れ、衆は叛き親は離れ、機に臨んで寤めず。自ら井に投じて、冀うに苟生を以てす。…… 古人に言

有り、亡国の主は、多く才芸有りと。これを梁、陳及び隋に考えれば、信に虚論に非ず。然れば則ち教義の本を崇はず、偏に淫麗の文を尚び、徒らに澆偽の風を長んで、乱亡の禍を救う無し」(『陳書』卷六後主紀魏徵論) という評価と、

「後主昔儲宮に在りて、早に令徳を標わす。南面して業を継ぐに及び、寔に天人の望を允す。礼、樂、刑、政に至りては、咸て故典に遵い、加うるに深く六芸を弘め、広く四門を闢く。是れを以て待詔の徒は、争って金馬に趨き、稽古の秀は、雲のごとくに石渠に集まる。且つ山に梯し海を航つて、朝貢する者往往にして歳ごとに至る。魏の正始自り晋の中朝以来、貴臣は治を識る者有りと雖も、皆文学を以て相い処り、庶務に関わること罕なり。朝章の大典も、方かに議に参ずるのみにて、文案簿領は、咸く小吏に委ぬ。浸以て俗と成り、陳に至るに迄ぶ。後主は因循にして、未だ改革に違あらず。故に施文慶、沈客卿の徒、軍国と要務を専掌し、左道を姦黠し、哀刻を以て功と為し、自ら身の榮えを取りて、国計を存せず。是を以て朝経は墮廢し、禍い隣国に生ず。斯れも亦た運鍾百六、鼎玉の遷変なり。唯だ人事の昌からざるのみに非ず、蓋し天意の然るところなり」(『陳書』卷六後主紀史臣論) という良い評価がそれである。

(2) 『唐五代志怪伝奇叙録』李劍国著、南開大学出版社、一九九三年。拙論「大業拾遺記について」、『中国中世文学研究』四十周年紀念論文集、二〇〇一年。

(3) とりわけ李白の詠金陵詩、詠陳後主詩が晚唐詩人に与えた影響は大きい。拙論「詠陳後主における李白詩『金陵歌送別范宣』の位置」、『東方学』第一〇七輯、二〇〇四年。

(4) 陳後主が井戸に隠れた史実を『陳書』と『南史』は次のように

伝える。

「後主聞兵至、從宮人十餘出后堂景陽殿、將自投于井」(『陳書』卷六後主紀)

「既而軍人窺井而呼之、後主不應。欲下石、乃聞叫聲。以繩引之、驚其太重、及出、乃與張貴妃、孔貴人三人同乘而上」(『南史』卷十陳本紀下)

(5) 朱敬則「陳後主論」に註釈を施したものに、『唐文選』高文・何法周主編、人民文学出版社、一九八七年がある。

(6) 清・賀貽孫の『詩筏』に、「陳後主、隋煬帝才思艷発、曾何救於敗亡也。傷哉」とあるのは、呂温の論のこの表現を意識したものであろう。

(7) 『采菽堂古詩選』は、立命館大学所蔵『采菽堂古詩選』三十八卷補遺四卷清康熙刊本、を参照した。